

加賀・能登地方の動物考古学史

平口哲夫（金沢医科大学・名誉教授）

はじめに

石川県における動物考古学の研究史を、加賀地方と能登地方に分けて述べるのは、二つの地形的な理由がある。

①加賀地方は、広大な加賀平野と白山などの高山を含む山地からなり、海岸線が直線的である。これに対し、能登地方は能登半島の特徴、すなわち狭い平野と低い山地からなり、海岸線が屈曲に富んでいる。

②加賀平野は手取川を中心に梯川・犀川・浅野川などにより形成された扇状地であり、これらの河川の下流域に内灘砂丘や小松砂丘によって日本海と隔てられた河北潟・今江潟・木場潟・柴山潟がある。これに対し、能登半島は外洋に面した外浦側と富山湾・七尾湾に面した内浦側では、水域環境に大きな違いがある。

①と②は、「加賀地方の潟に面する貝塚」と「能登地方の七尾湾に面する貝塚」における貝類組成に著しい相違をもたらしている。演題を「石川県の動物考古学史」としなかったのは、上記の理由のほかに、「石川」よりも「加賀」や「能登」のほうが、知名度が高いということもある。

学史的には、以下の三時期に区分して話を進めることにする。

I 期（1931～1975年）：貝塚が発見され、発掘調査も行われているが、出土した動物遺体については種の同定がなされている程度で、考古学的な分析や考察が不十分であり、発掘調査の方法も専門性に乏しい段階。

II 期（1976～1981年）：動物考古学的な専門性を持った発掘調査によって出土した動物遺体を分析・考察し、報告するようになった段階。

III 期（1982年以降）：大規模な発掘によって多量の動物遺体が出土し、多くの専門家が参加して調査・研究が進められるようになった段階。

なお、かつて、動物遺体が出土するのは縄文時代遺跡が中心であったが、開発に伴う発掘調査が進むにつれ、弥生時代以降の遺跡からの動物遺体出土例が増加したということも、III 期において特筆すべき事柄である。特に近世遺跡からの動物遺体出例の増加は、近世食生活の研究にとっても重要と言えよう。

1. I 期 (1931~1975 年)

日本のように遺物包含層が酸性土壌からなる場合が多い土地では、動物遺体は主に貝塚や低湿地遺跡から出土する。貝塚は多量に廃棄された貝殻に含まれる石灰分により骨が残りやすく、また低湿地遺跡は動物遺体が多湿の土壌に覆われて空気と遮断され、骨の成分が土壌中の無機質成分と入れ替わることによって骨の形が保たれる。

能登・加賀地方では、低湿地遺跡よりも貝塚からの動物遺体出土例が先行した。その最初の例が、河北潟に面する、かほく市宇ノ気町の上山田貝塚（縄文時代中期）である。この貝塚は、1930（昭和 5）年、気屋川堤防改修のための土取り中に大量の貝殻が出土したという情報が宇ノ気町の開業医・久保清氏に寄せられ、同氏により貝塚であることが確認され、翌年、発掘調査（第 1 次調査）が実施された。この発掘調査では、貝層はおよそ 3 層に分けられ、出土した貝類については、当初、石川県庁によって鹹水産貝類 12 種、淡水産貝類 5 種、合計 17 種が同定され、ニホンシジミ（ヤマトシジミ？）、ヒメタニシ、オオタニシ、カラスガイの 4 種が最も多いとみなされた。貝類だけでなく他の動物遺体も含めた同定は、1950（昭和 25）年、富山考古学会第 2 回総会の講師として来られた酒詰仲男氏（東京大学人類学教室）によって正式調査され、同行の林夫門氏（富山考古学会）によって『大境』創刊号に調査結果が掲載されている。それによれば、貝類 18 種、魚類 3 種、爬虫類 1 種、鳥類 1 種、哺乳類 9 種が同定されている。同貝塚は、1960（昭和 35）年に町史編纂の機運を推進するために、石川考古学研究会の高堀勝喜氏が調査担当者となり、第 2 次調査が実施された。第 2 次調査では、貝層は 2 層に大別され、各層はさらに 2 分され、出土貝類はシジミ、タニシ、イシガイを主とする淡水産が大部分であることが明らかにされている。（高堀 1979）

上山田貝塚第 2 次調査で出土した動物遺体については、直良信夫氏（早稲田大学考古学古生物学研究室）による報告（1964 年 8 月稿）によれば、貝類 23 種、魚類 11 種、爬虫類（3 種）、鳥類 8 種、哺乳類 12 種が同定されている（直良 1979）。

I 期には、上山田貝塚以外にも、加賀地方では加賀市の柴山湖底貝塚（縄文時代前期）・柴山貝塚（縄文時代中期）・猫橋遺跡（弥生時代後期）小松市の大谷山貝塚（縄文時代前期）・五郎座貝塚（縄文時代中期）・御保谷マセ洞穴（縄文時代後期）、能登地方では羽咋市の四柳貝塚（縄文時代中期）、羽咋郡志賀町の穴口貝塚（縄文時代中期）・堀松貝塚（縄文時代中期）、七尾市の赤浦貝塚（縄文時代中期）が発見ないし発掘されている。

2. II 期 (1976~1981 年)

上山田貝塚の第 3 次調査（1975 年）と第 4 次調査（1976 年）は、国指定史跡による保存を目的として実施され、第 4 次調査において貝層の分布する斜面の発掘が行われた。当時、

『平成 26・27 年度サントリー文化財団地域文化研究助成「加賀藩関連資料群を用いた近世日本食文化の研究」2015 年度一般公開講演 近世金沢の食文化』から転載、改訂

私は旧石器考古学を専攻していたが、東北大学の学生・院生時代に貝塚の分布調査や発掘調査に参加した経験が何度かあり、貝塚研究にも大いに興味を持っていたので、調査主任を引き受けることにした。貝層の発掘調査と動物遺体の調査については、動物考古学専攻の松井章氏（当時、東北大学大学院生）に特別調査員として協力してもらった。貝層は館山（たちやま）と呼ばれる丘陵の北斜面と南斜面に形成されているが、北斜面の貝層（北貝塚）はわずかしか残存していなかったため、南斜面の貝層（南貝塚）の調査に主力を注いだ。

南貝塚では、第2次調査トレンチを南北に延長して幅1m・長さ32mのトレンチ設定し、2mごとに区切った第1～第16区の小区画ごとに発掘作業を進めた。貝層は第4区南半から第12区北半まで広がり、最大厚1.5m、第5～第7区では混貝土層・混土貝層・魚鱗層などが5～10cmの厚さで互層をなし、細別すれば50層を超える。第5・6区間、第7・8区間、第9・10区間において30cm角の柱状ブロックサンプルを4本採取した。また、適宜、貝層ブロックを現場で水洗して、魚骨その他の小遺物の採集に努めた。柱状ブロックサンプル4本のうち、第3ブロック（第5・6区間）と第4ブロック（第9・10区間）を当面の分析対象に選び、層ごとに試験フルイを用いて水洗選別し、魚骨などの小遺物を検出した。

第4次調査出土の動物遺体は、貝類20種、魚類16種、両生類1種、爬虫類2種、鳥類9種、哺乳類13種が同定された。上山田貝塚の貝層を構成する貝類は、柱状ブロックサンプルで調べた限り、小川に生息する淡水産イシガイが全貝層を通じて圧倒的に多く、次に沼地に生息する淡水産タニシ類、海産のオキアサリがどの貝層にもよく見られ、意外にも汽水産ヤマトシジミはオキアサリよりも出現率が低かった。オキアサリは、層によってはイシガイやタニシ類よりも出現率が高かった。この事実は、貝塚の最寄りの水域が小川や沼地であり、それよりも離れて汽水域や鹹水域があり、オキアサリの出現率の違いは年代的变化ではなく、海辺まで出かけて採取する季節性を示すものと解釈することができる。魚類においても淡水産のコイ科魚類（フナ、コイ、ウグイ）が圧倒的に多く、淡水産のナマズが次に多い。汽水域～淡水域に侵入してくるスズキやクロダイの骨、鹹水域に生息するマダイやフグ類、サメ類、エイ類の骨も目立って出土している。かなり大型のサケ類の椎骨が出土しているが、完形のもの1例のみで、他はすべて細片となっており、その要因としては骨質の弱さだけでなく、調理方法などの人為的要因も考慮する必要がある。（松井・平口1979）

3. Ⅲ期（1982年以降）

1) 真脇遺跡

鳳珠郡能登町（旧・鳳至郡能登町）の真脇遺跡は、第1次調査（1982年）と第2次調査（1983年）において、イルカ骨が縄文時代前期後葉～晩期の各層から出土し、特に前期末

～中期初の層から多量に出土した。この発掘で出土した動物遺体の調査を担当した私は、イルカについては宮崎信之氏（当時、国立科学博物館動物研究部）に専門調査員として調査団に加わっていただき、共同して調査を進めた。また、陸生哺乳類の鑑定にあたっては、金子浩昌氏（当時、早稲田大学考古学研究室）、西本豊弘氏（当時、国立歴史民俗博物館考古研究部）、松井章氏（当時、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター）から教示や比較標本の提供を得た。そのほか、鰭脚類については伊藤徹魯氏（当時、朝日大学歯学部）に鑑定していただき、のとじま水族館からは魚類標本の提供を受けた。

真脇遺跡の調査以前にも縄文時代遺跡からイルカ骨が出土した例が少なからずあり、縄文時代イルカ漁の可能性を指摘する研究者もいたが、これを実証する決め手に欠けていた。縄文時代イルカ漁の考古学的証明を難しくしている要因は、二つある。第一に、真脇遺跡のようにイルカ骨が多量に出土したとしても、イルカの集団漂着を利用したにすぎないかもしれないので、イルカ骨の多量出土だけでは縄文時代イルカ漁の証明にはならない。第二に、一般にイルカ漁は特別の道具を要しないので、人工遺物から証明することも難しい。日本のみならず世界各地の民族例でも知られるように、イルカを捕獲しやすい環境で人手さえ確保すれば、あとは舟と櫂、音をたてるための石や棒を用意するだけで、イルカの習性を巧みに利用した追い込み漁によって、イルカの群れを捕獲することができるのである。幸運にも真脇遺跡は、縄文時代イルカ漁を証明するに適した好条件を以下のように備えていた。

①真脇遺跡出土イルカは、カマイルカ、マイルカ、ハンドウイルカ、オキゴンドウ、コビレゴンドウ、ハナゴンドウ、以上6種類からなるが、追い込み漁では効率よく捕獲するのが難しいカマイルカが個体数の約60%を占め、追い込み漁で捕獲しやすいマイルカは30%余りにすぎない（宮崎・平口1986）。

②真脇遺跡では、石槍が北陸の縄文時代遺跡としては例外的に多く出土しているが、獣類個体数の約90%がイルカで占められていることから、シカ・イノシシなどの陸獣類に石槍が用いられたのではなく、カマイルカ漁に用いられたと考えられる。（平口1986）

③18世紀初期の文書「富山前田本草」に、カマイルカは網で捕らえるのは難しいから銚などで突くのがよいという意味のことが記されている（盛永・安田1990）。

④『能登国採魚図絵』（1838：天保9年）には、毎年決まった季節に回遊してくるイルカの群れを網で包囲しながら追い込む、真脇「いるか廻し」の様子が描かれており（田川1982）、この地が手漕ぎの舟でイルカ漁をするのに適した環境に恵まれていたことがわかる。

⑤能登半島ではイルカの集団漂着の例はない。外浦側では鯨類がしばしば漂着するが、真脇遺跡の位置する内浦側では主に定置網で鯨類が混獲されている。近世においても、外浦側で捕獲された鯨類は主に漂着・迷込鯨類、内浦側では台網による捕鯨が盛ん。（平口1995）

『平成26・27年度サントリー文化財団地域文化研究助成「加賀藩関連資料群を用いた近世日本食文化の研究」2015年度一般公開講演「近世金沢の食文化」』から転載、改訂

2) 三引貝塚

1995・96・98・99年度に発掘調査された七尾市(旧・田鶴浜町)三引遺跡の縄文時代前期初頭貝塚(以下、三引貝塚と呼ぶ)からは、貝類・魚類・哺乳類などの動物遺体が多量に出土した。これらの動物遺体の調査は、貝類を金山哲哉氏(石川県埋蔵文化財センター)、海生哺乳類を私(当時、金沢医科大学教授)、シカ・イノシシを山川史子氏(石川県埋蔵文化財センター)、イヌ・小型哺乳類を茂原信夫氏(当時、京都大学教授)、鳥類を江田真毅氏(当時、東京大学大学院生)、魚類をパリノ・サーヴェイ株式会社が主に担当した。私は、これら全体の整理・研究を指導する立場にあり、報告書の基礎編では海生哺乳類について概略を紹介するとともに、動物遺体からみた三引貝塚の特徴と重要性について「まとめ」を書いた(平口2004)。さらに研究編においては、海生哺乳類の主体をなすイルカを中心に取り上げながらも、その視点から三引遺跡縄文時代前期初頭の狩猟・漁撈活動全体を考察した(平口2005)。なお、研究編では、茂原信夫氏がイヌについて、江田氏が鳥類について、石黒直隆・渡部琢磨両氏(当時、帯広畜産大学)がイノシシのDNA分析について、米田穰氏(当時、独立行政法人環境研究所)が人骨・動物骨の同位体分析について論文を寄稿している。

三引貝塚出土哺乳類遺体の整理は途上にあるため、破片法による暫定的な哺乳類組成を算出し、シカ76.0%、イノシシ10.3%、イヌ3.9%、その他の小型獣類1.3%、イルカ類7.5%、鰭脚類1.0%という結果を得た。真脇遺跡、朝日貝塚、赤浦貝塚、上山田貝塚については個体数法により哺乳類組成を比較したことがある(平口1986)。

陸生哺乳類：海生哺乳類では、三引91.5%：8.5%、真脇6.9%：93.1%、朝日31.6%：68.4%、赤浦82.1%：17.9%、上山田90.2%：9.8%。すなわち、哺乳類全体に占める陸生哺乳類の比率という点では、三引貝塚は上山田貝塚に近似して90%を超え、海生哺乳類が90%を超える真脇遺跡とは対照的である。

シカ：イノシシでは、三引76.0%：10.3%、真脇3.1%：2.2%、朝日7.9%：21.1%、赤浦35.7%：32.2%、上山田14.6%：19.5%となり、三引貝塚ではシカの出現率がきわだって高く、同じ七尾湾に面する赤浦貝塚でシカとイノシシが共に30%台を占めているのとは大きな違いを見せている。

小型陸生哺乳類(イヌを含む)は三引5.2%、真脇1.6%、朝日2.6%、赤浦14.3%、上山田56.1%となる。上山田貝塚で小型が高率を占めるのは、ムササビ19.5%を筆頭にタヌキ9.8%などイヌ以外の小型が多く出土していることによる。また、赤浦貝塚の場合、発掘調査の前に貝塚部が破壊されたため、表採資料によるほかに、哺乳類資料の個体総数も他の遺跡に比べて少ないことから、統計的な信頼度は低い。上記4遺跡のうち、小型陸生哺乳類の中でイヌが主体を占めるということが明確なのは三引遺跡だけである。

哺乳類組成が示すように、三引貝塚の狩猟活動の中心はシカ猟である。三引貝塚出土のイヌの骨にはほとんど解体痕が認められないことから、当貝塚においてもイヌが食用としてではなく狩猟用として飼われていたと考えられる。ところが、三引貝塚の場合、イヌの裂肉歯や犬歯の損傷が宮城県気仙沼市田柄貝塚出土の縄文時代犬に比べて著しく少なく、歯の生前の脱落も少ないようである。この原因として、三引貝塚の狩猟がシカ猟を主としていることから、イノシシ猟が盛んに行われた田柄貝塚などに比べて狩猟中に歯に損傷を受ける危険性が少なかったという可能性を指摘することができる。三引貝塚の周辺はシカの追い込み猟が行われていた土地柄であり、その起源は縄文時代にまで遡る。それは、近世にイルカ漁が盛んであった真脇において縄文時代にもイルカ漁が盛んに行われていたのによく似ている。

おわりに

近世遺跡から出土した動物遺体については、それ以前に比べて文献・民俗資料が多いことから民族考古学的な研究がしやすいので、今後の研究成果が大いに期待される。

文献

- 平口哲夫，1986：「富山湾沿岸における縄文時代のイルカ捕獲活動」『大境』，10：51-68.
- 平口哲夫，1995：「能登地方における鯨類出土遺跡と近世の鯨類捕獲・漂着記録」，日本海セトロジー研究，5：5 - 12.
- 平口哲夫，2004：「動物遺体から見た三引遺跡の特徴と重要性」『田鶴浜町三引遺跡Ⅲ』，石川県埋蔵文化財センター，359.
- 平口哲夫，2005：「三引遺跡における縄文時代前期初頭の狩猟・漁撈活動—海生哺乳類、特にイルカ遺体を中心に—」『田鶴浜町三引遺跡Ⅳ』，石川県埋蔵文化財センター，53-62.
- 松井章・平口哲夫，1979：「動物遺体」『上山田貝塚』，宇ノ気町教育委員会・石川考古学研究会，100 - 121.
- 宮崎信之・平口哲夫，1986：「動物遺体」『石川県能都町真脇遺跡』，能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団，346 - 400.
- 盛永俊太郎・安田健(編)，1980：『享保元文諸国産物帳集成 16』，科学書院.
- 直良信夫，1979：「上山田貝塚の自然遺物」『上山田貝塚』，宇ノ気町教育委員会・石川考古学研究会，155 - 160.
- 高堀勝喜，1979：「調査の沿革」『上山田貝塚』，宇ノ気町教育委員会・石川考古学研究会，8 - 18.
- 田川捷一，1982：「能登国採魚図絵」『能登町史』，4：1139 - 1184，石川県能都町役場.
- 『平成 26・27 年度サントリー文化財団地域文化研究助成「加賀藩関連資料群を用いた近世日本食文化の研究」2015 年度一般公開講演 近世金沢の食文化』から転載、改訂

「加賀・能登地方の動物考古学史」図版・解説

平口 哲夫



図1. 上山田貝塚の発見者 久保清氏:1930年に発見、翌年に発掘。

500m圏内には日本海も河北潟も入らず、低地 88%と丘陵 12%が占めているだけである。半径 4km では海 7%、潟 7%、低地 28%、丘陵 58%となる。内灘・栗崎砂丘の縄文時代前期後葉遺跡の分布状況からして、貝塚形成期にはすでに潟の外形は出来ていたものと考えられる。干拓前の河北潟汀線から貝塚までは約 2km であるが、貝塚形成期の潟汀線の目安とした海拔 1.2m 等高線からは約 1km を測る。上山田貝塚の魚貝類組成では淡水産魚貝類が圧倒的多数を占めているので、少なくとも 500m 圏内の低地は、貝塚形成期には河川・湖沼地帯をなしていたと推定することができる。

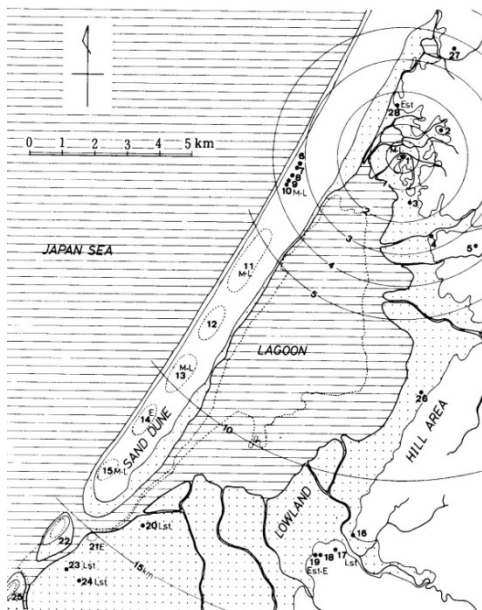


図2. 上山田貝塚周辺の地形と縄文時代中期の水域推定：上山田貝塚を中心とした半径



図3. 上山田貝塚第4次調査(1976)における南貝塚の発掘トレンチ全景



図4. 赤浦貝塚周辺の地形と縄文時代遺跡：赤浦貝塚は七尾南湾に通じる赤浦潟の東岸、海拔35m丘陵の西南斜面に形成されていた。貝塚を中心とする半径500m圏内は海0%、潟16%、低地48%、丘陵36%という地形分布率を示す。1km圏内でも海はまだ入っていない。4km圏内で、海30%、潟1%、低地27%、丘陵42%となる。内湾性のアサリが主体を占める貝類組成の特徴からして、貝塚形成期の赤浦潟は入江として七尾湾の一部をなしていたと考えられる。

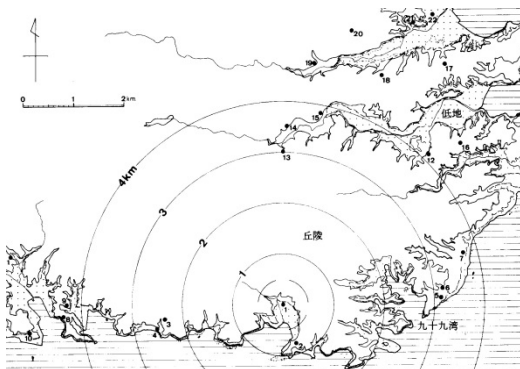


図5. 真脇遺跡周辺の地形と縄文時代遺跡：能登半島の内浦、富山湾の湾口部に位置する真脇遺跡は、海岸線まで遺跡南端から約

300m、遺跡の中心から測っても400mという近距離にある。遺跡を中心とする半径500m圏内では、海5%、低地33%、丘陵63%をなす。4km圏内では海41%、低地3%、丘陵55%となり、上山田貝塚や赤浦貝塚に比べて海域の占める率が高く、逆に低地は著しく低率である。イルカ漁が盛んに行われていた縄文時代前期後葉の頃は、海岸線が現在よりもさらに内側に入り込んでいて、海の占める率は現在よりもさらに大きかった。哺乳類組成においてイルカが圧倒的多数を占めることが端的に示しているように、真脇遺跡出土の水産動物遺体は外洋性のものが中心をなす。

平口哲夫, 1985:「北陸における縄文時代の動物遺体出土遺跡と水域環境—上山田貝塚の立地分析を中心に—」『石川考古学研究会会誌』, 28: 57-78.

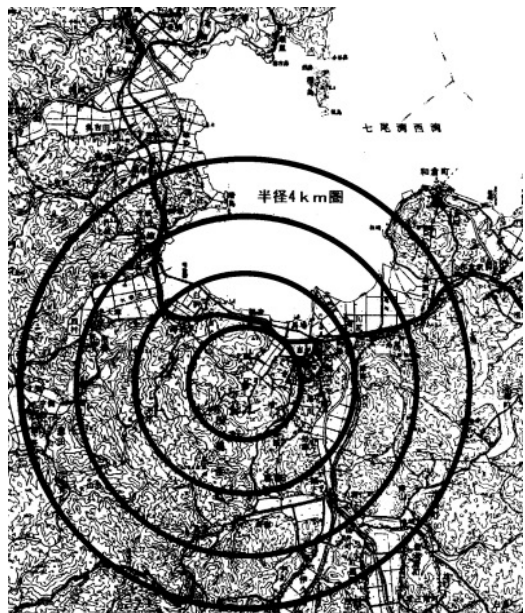


図6. 三引貝塚周辺の地形：三引貝塚（縄文時代前期初）は七尾湾の西湾最奥部に位置

【金沢ひまわり平和研究室 文献リスト <http://sophiruka.sakura.ne.jp/KHP/publication/pamphlet.htm>】

する内湾性の主鹹貝塚である。丘陵の裾に近い低地に4貝塚と1小貝塚が標高0m前後の位置で発見されており、自然貝層も部分的に認められることから、当時の海は現在の低地部に深く浸入して屈曲の多いリアス式海岸を呈していたと考えられる。この貝塚を構成する主要貝類はハイガイ、サルボウガイ、ヤマトシジミの3種であるが、このうちハイガイは七尾湾の南湾に面する赤浦貝塚（縄文時代中期）からは出土しておらず、赤浦貝塚の貝類で最も多いアサリは三引貝塚ではさほど主要な存在ではない。現在では伊勢湾以南にしか生息していないハイガイが三引貝塚の主要貝類をなしているのは、貝塚の年代が縄文時代前期初頭（約6000年B.P.）という、現在よりも温暖な時期に相当するからである。

平口哲夫, 2005: 「三引遺跡における縄文時代前期初頭の狩猟・漁撈活動」『七尾市三引遺跡Ⅳ』, 石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センター, 53-62.



図7. 真脇遺跡第2次調査1区H24グリッド出土カマイルカ頭蓋骨:2頭とも裏返しの状態で並列して出土している。解体直後に裏返しにして捨てたのならば、軟部組織が腐ってからも耳の骨（耳周骨・鼓室胞）が頭

蓋底に密着して出土していいはずであるが、近接した位置では耳周骨・鼓室胞が全く出土していない。したがって、この並列頭蓋骨は、軟部組織が腐って耳周骨・鼓室胞が遊離したあと、どこからか運び込まれて安置された可能性が高い。

平口哲夫, 1997: 『遺跡出土イルカ骨の計測値と非計測的形質による個体別分析:平成7年度科学研究費補助金(一般研究C)研究成果報告書』, 金沢医科大学.



図8. 三引貝塚出土イヌ頭蓋骨左側面:三引遺跡から出土したイヌは、額段(ストップ)が小さく、オオカミや一般的な縄文時代犬に見られるように、かなり直線的である。

茂原信生, 2005: 「三引遺跡出土の縄文時代犬骨に関する考察」『七尾市三引遺跡Ⅳ』, 石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センター, 63-70.



図 9. 小松市荒木田遺跡水場遺構出土のヤマトシジミ（奈良時代後期）：この水場遺構から出土した動物遺体は貝類（イガイ、マガキ、ヤマトシジミ）、甲殻類（カニ類の一種）、魚類（ニシン亜目の一種、コイ科の一種、サバ類、アジ科の一種、スズキ、タイ科の一種、マフグ科の一種）、哺乳類（ウシ、イノシシ）、その大部分はヤマトシジミである。ヤマトシジミは貝類の 95.2% を占め、水場に敷き詰められた状態で出土している。貝類の石灰分（炭酸カルシウム）には、水中の鉄分などを吸着するなど、水を浄化する働きがある。この水場からはモモの種子も多量に出土しており、モモにごく微量に含まれるシアン化水素には殺菌力がある。ヤマトシジミの貝殻も、モモの種子も水の浄化に役立てられたものと考えられることができる。

平口哲夫・山川史子,1995：「小松市荒木田遺跡水場遺構出土動物遺体」『荒木田遺跡』,石川県立埋蔵文化財センター,87-98.

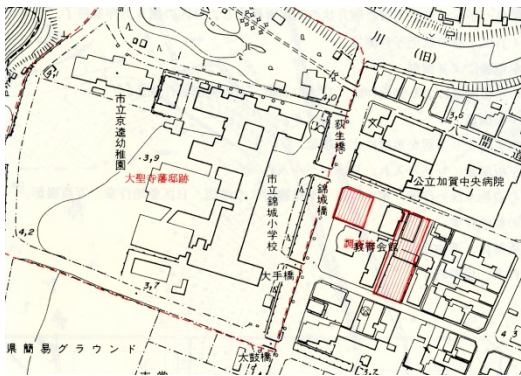


図 10. 加賀市八間道遺跡の周辺地形図（庄田和世 1996）：八間道遺跡には 1639（寛永 16）年の大聖寺藩創設当初から明治維新家まで家老屋敷が構えられていた。貝類（サ

ザエ、イガイ、マガキ、ヤマトシジミ、コタマガイ、オキアサリ、チョウセンハマグリ）、魚類（ネズミザメ亜目の一種、サケ類、マダイ、タラ科の一種）、鳥類（ガン類、カモ類）、哺乳類（イヌ、タヌキ）が出土。遺跡は熊坂川と旧大聖寺川の合流点に近く、丘陵にも近接した低湿地に位置し、現海岸線までの直線距離は約 6km。同環境の縄文・弥生時代遺跡から魚貝類が多数出土した場合、それは淡水産を主体としたものになるだろう。しかし、八間道遺跡出土魚貝類の圧倒的多数は鹹水産、それ以外は汽水産ヤマトシジミがわずかに含まれているだけ。藩邸住人も淡水産や汽水産の魚貝類を大いに食べたはずだが、生ごみの処理方法が縄文・弥生時代とは異なっていたのであろう。

平口哲夫・溝口優司・小川数也・茂原信生,1996：「加賀市八間道遺跡出土の動物遺体」『八間道遺跡』,小松市教育委員会,267-281